

通り雨

ゆーきち

六月に入り、湿気の多い時期となった。雨天が増え、恐らく多くの人がこの空気のように湿気の多い顔となつていていることだろう。

私は雨が、雨の降るこの季節が好きだ。

雨の降る景色が好き。雨の降る音が好き。雨の出す香りが好き。雨の日に図書館で水滴と本のマリアージュを楽しむのは至福のひとつときだ。

一つの物語を読み終わるころには、降り出した雨も止んでしまう。一つの世界を閉じた満足感と、別れの寂しさもまた、一つの楽しみだ。

今日も図書館に通う。騒がしい日々も、雨と一緒に流してくれる。今日は併設しているカフェでコーヒーでも飲むかしら。

カフェには私以外の客はいないようだ。おかげでゆっくりと過ごせそうだ。

「いらっしやいませ、好きな席へどうぞ」

職員ではない、大学生と思しき男性に案内されて席についた。少しもしないうちに、注文した品が届けられた。

「よくいらしてますね。雨の日も」

カフェの店員に声をかけられたのは初めてだ

った。淹れたたてのアイスコーヒーは、氷が風鈴のように音を立てていた。

「はい、私、本を読むのが好きなんです。特に、雨の日に」

青々しい爽やかさを感じさせるアルバイターは太陽のように微笑み、「ごゆっくり」とだけ残して店の奥へ消えていった。

閉館に気付いたのは、雨が止んでしまつてからだ。飲みかけのドリンクも水たまりを作つている。

「またいらしてくださいね」

「ええ、もちろん」

会計時にアルバイトの子の言葉を受け止めながら、しめっぽい傘を片手に図書館を後にした。

気温の高い真夏日だった。暑い暑い、陽炎の揺れる夏の日。今日も私は図書館に来ていた。

エアコンの効いた館内で汗を拭き拭き、麦わら帽子だけでなく、日傘をさしてくるんだった。

いつものように本の雲海へ足を踏み入れる。

この空間を雲海とするなら、本は雲の中の水滴や結晶といったところかしら。

おやと思つたのは、本棚とにらめっこする横

顔に見覚えがあったからだ。

今日はカフェの制服ではなく、清潔感のあるシャツを着用している。袖口から伸びる腕には血管が浮き出していた。

「何かお探ですか？」

職員のような言葉に、彼は一瞬当惑したようだが、すぐに持ち直した。

「ええ、どの本を読んだらいいかわからなくて」  
彼ははにかんだように笑う。ここ一帯の本は一通り読んだな。

「私のおすすめはこれです。」

私は迷うことなく一冊の本を手にとった。これではどちらが図書館の人間かわからない。天気雨のようにチグハグだった。

「ありがとうございます」

「いいえ、それでは」

今日も閉館時間まで充実した時間を過ごせた。来館者もすでにまばらだ。かなり身長差のある男女学生が哲学書を抱えて帰るのが見えた。

外は……土砂降りだ。昼間の熱気を冷ますように大粒の雨が滴っていた。これでは帰れない。「すごい雨ですね」

アルバイトの青年が声をかけてきた。彼も閉

館時間まで残っていたようだ。

「傘……ないんですか？」

「ええ……降るとは思ってたなくて」

「夕立ですから、きつとすぐに止みますよ」

彼はそういつて微笑む。右手には小洒落たチエック柄の傘が握られていた。

「……止みませんね」

天気予報は外れ、いまだに大粒の雨が大地に降り注いでいた。

このまま立ち往生をしても、空が泣き止んでくれるとは思えない。とはいえ傘なしでの雨の中帰るのは、賢い選択ではない。

「帰らないんですか？」

私は隣で立ち尽くす青年に尋ねた。彼がここに残る理由はない。

「よければなんですけど……」

彼は恥ずかしそうに目を逸らすと傘を広げた。チェックの幾何学模様様が波紋のように広がる。

「一緒に帰りませんか？」

突拍子もない提案に、私はなぜだか頬が染まるのがわかった。

「服、濡れてないですか？」

気遣う彼の左肩は雨を吸って鎖骨が透けていた。

「はい……。ありがとうございます」

この気持ちは申し訳なさか恥ずかしさか、あるいは……。

駅前のバス停まで着いたところで、私は傘から出た。夕立は弱まりつつあった。

「ありがとうございます。いつかお礼をさせていただきますね」

「いえ、僕も話せて嬉しかったです」

微笑む彼が眩しく見えたのは、太陽が顔をのぞかせたからだろう。

「綺麗ですね」

そう言われた私は、さらに紅潮したが、すぐに思い直した。滴る雨水が太陽光を乱反射させ、ダイヤモンドダストのようにあちらこちらで輝いていた。

「雨、いいですね。あなたとこうして話せた」

彼が傘を振るたびに、雨水がキラキラと弾け、小さな虹を形作った。

「またお話ししましょう。お待ちしております」

見送られながら、私はバスに乗り込んだ。雨が止んだ後も、雨と太陽の織りなす不思議な空

気が私を包み込んでいた。

やっぱり、私は雨が好き。雨の降る景色が好き。雨の降る音が好き。雨の出す香りが好き。あなたと出逢えた雨が好き。